

# 人権なら

2021年7月1日

第127号

NPO なら人権情報センター

●ひと・まち・生き生き

## 事業報告・事業計画を確認

### NPOなら人権情報センターが第21期総会

NPOなら人権情報センターは6月13日、田原本青垣生涯学習センターで第21期通常総会を開催した=写真。



香川明英理事が進行を務めた。古川友則・理事長は、開催を巡っては、コロナ感染が気がかりだったが、事務局内で議論を重ね、事業の報告や方針をまとめた。十分に議論を、とあいさつ。



吉田晴行・県くらし創造部長らの祝電・メッセージ10通の披露のあと、議事録署名人に馬出昭浩さんと吉岡弘子さんを選出した。

### 子どもの課題、ハンセン病、障害者問題で論議

議案の審議に入り、西原学専務理事が2020年度事業報告、植村照子副理事長が同収支報告、山本恵副監事が同監査報告を、それぞれ提案した。

質疑では、池原真知子理事が高校奨学金問題や、親の介護で不登校のヤングケアラー問題に取り組んでいる。各地域でもそうした取り組みを、と提起した。

古川理事長は、昨年も子どもの課題について提起していただいた。かいほう塾や人権情報センターの中で普遍化する努力を続けていきたいと答えた。

続いて、古川理事長が2021年度事業計画(案)、植村副理事長が同予算(案)を提案した。

質疑では、寺田俊一さんが、第1回「架け橋 交流・

講演会」が予算に反映されていない。交流・講演会に全力で取り組んでほしいと要望。池原さんは町のまほろばセンターに「障害者死ね!」と書かれた紙が置かれる事件が5月にあった。西和7町にも置かれていた。平群町でもあり、関係自治体での連携した取り組みが必要だ、と提起した。



古川理事長は「架け橋 交流・講演会」の予算は間に合わなかった。当然、対応し、全力で取り組んでいく。池原さんの提起は、各市町村との連携が必要で、対応の強化が重要だと答えた。

最後に、すべて議案を採択して総会を終えた。

### 総会后、外国人労働者の問題を学習

総会終了後、第1回学習会を開催した。外国人労働者奈良保証人バンク事務局長の山本直子さんが、「外国人労働者保証人バンク29年ー私たちは多文化共生の時代を生きるー」と題して話をした。

山本さんは、バンク取り組みの契機は西大和団地にある教会の神父から相談を受けたこと。町議でいながら、地元外国人の人材派遣会社があり、外国人の実態も知らなかったことに恥ずかしい思いをした。

日本は外国人の労働力を利用し、使い捨てにしているとして、色んなケースを挙げ、問題を解決してきた事例を紹介した。日本は移民を認めていないが、実態は移民社会だ。それを認めないと、ズレや矛盾はますます拡大する。モノやカネは国境を越えて移動する。人も同じだ。人権や労働者の権利がどう担保されているかは大変重要なこと。労働力としか見ない日本の政策は、国際社会からも批判されている。移民問題は労働問題であり、人権問題である、と語った。

# 集会テーマや企画を確認

## 「差別と人権」研究集会第1回実行委員会で

9月に開催の第12回「差別と人権」研究集会。その第1回実行委員会が6月25日、田原本青垣生涯学習センターであった。行政関係者や、各種団体、支



局の代表など、関係者が出席。協議し、確認した。

古川友則理事長が「コロナの感染状況は昨年より、より深刻さを増している。今年は何としても開催したいと検討してきた。ご協力をいただきながら、全力で取り組みたい」とあいさつした＝**写真**。

西原学専務理事が集会日程や規模などを提案したあと、集会企画としては、中止になった昨年の集会テーマを継続してほしいとの要望を受け、「コロナパンデミックと差別ーこの国の今を考える」とする開催を提案。現在の時代認識としては、コロナウイルスに世界中が振り回されている。腐敗した政治、低迷する経済に加え、私たちの生活は自粛要請で日々の生活が脅かされ、制約されている。人間関係が断ち切られていき、不安は高まる一方だ。雇止めや倒産が相次ぎ、失業者が増えている、などと提起した。

## 「コロナパンデミックと差別」をめぐって論議

記念講演は、藤原辰史・京都大学准教授がコロナ禍の1年半が過ぎ、見てきたこと、考えてきたことを「パンデミックを生きる指針ー歴史研究のアプローチ」を軸にリモートで語る。パネルディスカッションは、最首悟・和光大学名誉教授(リモート参加)、高橋年男・沖縄県精神保健福祉会連合会事務局長、加藤めぐみ・大阪府済生会ハンセン病回復者支援センターコーディネーターの3人が活動報告と「コロナパンデミックと差別」をめぐって発言。それを受けて、論議し合う。

会場では、パネル展「『闇から光へ』知られざる沖縄の戦後史ー精神保健の歩み」も開く。精神障害者を

「私宅監置」した実態を伝える。

次回実行委は7月28日に開催する、とした。

\*\*\*\*\*

# 7月26-31日、三宅町で

## 巡回展「先住民族アイヌは、いま」を開催

4月から始まった巡回展「先住民族アイヌは、いま」は、県内8市町村の会場を巡って10月まで続く。

7月は、26日から31日まで、三宅町「あざさ苑」で開催される。29日は午後1時から、町交流センターMii Moで「盗掘されたアイヌの遺骨と私たち」をテーマにした講演がある。

「先住民族の権利に関する国連宣言」が2007年に採択された。日本政府も賛成。2019年には、「アイヌ施策推進法」が施行された。だが、この推進法では、アイヌの自決権、自治権、土地や領域、資源回復や補償について触れていない。国連の宣言とはかけ離れている状況だ。

私たちはアイヌ民族と日本人(和人)の歴史的関係性や、アイヌ民族がおかれている現状を知る必要がある。展示では、幕藩体制下の支配や、日本国民に同化させる政策による抑圧や差別に抗してきたアイヌ民族の歴史や、継承されてきた伝統文化を紹介する。

主催する「先住民族アイヌはいまを考える会」(浅川肇・委員長)は、この巡回展がアイヌ民族の先住権・自決権を尊重するとともに、アイヌ民族をはじめとする多民族・多文化の共生社会を実現する一助となることを願っている。問い合わせは0744-43-0686まで。

\*\*\*\*\*

## ■源泉徴収税上半期相談会を実施中

奈良県中小企業者協会は6月29日から、源泉徴収税上半期相談会を実施している。7月12日まで(土、日を除く)。対象は納期の特例申請済みの会員。

給与所得者を雇用する事業主で、源泉徴収義務のある会員は、事務所まで連絡を。0744-33-3939。



## 人間観・生き合い方を提起

### 藤田敬一さんが天理人権教育推進協で講演

天理市人権教育推進協議会が6月19日、市民会館で第1回「人権講演会」を開催＝写真。



岐阜県人権懇話会会長の藤田敬一さんが「部落・人権・人間－私が歩んできた63年の道」と題して話をした。

内田智之・同会長は「当協議会が50周年を迎え、記念事業として開催した。藤田さんに話をさせていただく。実りある講演会にしたい」とあいさつ。司会の藤田幸司さんが講演会の趣旨を述べ、講師を紹介した。

藤田さんは、水平社で活動してきた人たちとのエピソードから切り出した。最初に名前を思い出すのが木村京太郎さん(当時、部落問題研究所常務理事)。もう一人は朝田善之助さん(当時、部落解放同盟京都府連委員長)。そして忘れられない人が米田富さんだと言う。この63年間、「途中下車・前途無効」にならなかったのは、多くの良い人たちと出会ってきたから、と感慨深く語った＝写真。



### 「ひととは生き合う中で生きる力をもらっている」

次に、「嫌な子だった」私、「間違い、失敗、挫折したことがある」私、「体験を忘れた」私、「涙が乾けば忘れた」私、「自分に関係ないことには関心が向かない」私、と「自分史を振り返り」ながら、話を進めた。

続いて、点字ブロックはどこの国でできましたか？ 女子トイレの行列なぜ？ 女性の参政権はいつ？ など、参加者に質問しながら、「分からなかったら、適当に答えれば良い」のだと。参加者を引き込みつつ話が弾んでいく。緊張がほぐれていくのが不思議だ。

ACジャパンの広告で流れる「ここはだれにも見えないけれど、ここづかいは見える。思いは見えない

けれど、思いやりはだれにも見える」(宮澤章二「行為の意味」)と、「見えぬけれどもあるんだよ、見えぬものでもあるんだよ」(金子みすゞ「星とたんぽぽ」)を紹介。「いのち・生き合う」ことの意味を考えてきた。「心していること」は身近なところから深く感じ、広く考えることだとして、「なぜ」「どうして」を大切にしたい、と。

最後に、「人間」、じんかんということば、出会いと繋がり、ひとは「生き合う中で生きる力をもらっている」。「人間観・生き合い方・生き方」に触れて、自己内対話・自己対象化の大切さを語り、話を締めた。

\*\*\*\*\*

## 忍性像安置の浄土寺を訪問

### 「架け橋 交流・講演会」でフィールドワーク予定

NPOなら人権情報センターは11月に第1回「架け橋 交流・講演会」を「架け橋 長島・奈良を結ぶ会」と共催で取り組む。その成功に向けて今、準備を進めている。

『「架け橋 交流・講演会」－ハンセン病問題“真の人間回復”をめざして』は11月27日、三宅町で催す。三宅町などが後援。



「交流・講演会」では、フィールドワークも企画。その際、三宅町屏風にある浄土寺を訪れる。その浄土寺を6月1日に訪ねた。住職の藤田能宏さんに会い、当日、話をさせていただくことを依頼。承諾を得た。

浄土寺本堂には忍性像が鎮座する＝写真。像の制作者は奈良の若手彫刻家、吉水快聞(かいもん)さん。忍性像は2019年7月、三宅町文化ホールであった開眼法要のあと、この浄土寺に安置された。

藤田さんからは、風の抜ける本堂で忍性の話を伺った。忍性は三宅の屏風で生まれる。母の死を弔うため、額安寺で出家した。のちに、ハンセン病の人たちの救済活動に尽力する。奈良坂にある日本最古の施設とされる「北山十八間戸」を開設する。地域の人々とともに、橋や井戸も作り続けた、など、忍性にまつわるたくさんのお話を聞かせてもらった。



## 「サケとアイヌ民族」を語る

### 出原昌志さんが河合町でのアイヌ巡回展で

巡回展「先住民族アイヌは、いま」が4月から県内8か所で取り組まれている。主催は先住民族アイヌのいまを考える会。巡回展はアイヌの人々の人権課題を共に考え、将来にわたり多文化共生の一助となることをめざしている。



その巡回展が6月15日、河合町中央公民館であった。パネル展示とミニ講演会があり、講演は「先住民族アイヌの声実現！ 実行委員会」の出原昌志さんが「サケとアイヌ民族」の演題で話をした＝写真。

### アイヌにとって「サケ」はカムイチェブ(神の魚)

アイヌの人々にとって「サケ」はカムイチェブ(神の魚)。サケはシロサケ、サクラマス、カラフトマスと、川に遡上する時期が異なる。漁期は初夏から12月初旬の約半年。産卵のために遡上するので、安定した捕獲ができ、冬を乗り切る保存食や、交易に使われた。

### 編集後記 ☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆

間近に迫った東京五輪。政府・都は強行開催の構えだ。連呼する「安全安心」は招致時の「アンダーコントロール」と同じ響きだ。「安全安心」を本気で考えるなら、中止しかないはず。でも、強行する。コロナ感染がさらに蔓延し、多数の死者が出て構わない。欧米に比べれば、「さざ波」程度。今は「戦時」。死人が出るのを恐れている、「戦争」は遂行できない。権力者たる者、それぐらいの気構えが必要との考えだ。他人の犠牲の上に成り立つメガ・イベントって何なのか。このあとに来るのは感染の拡大、経済の落ち込み…。社会は崩壊だ。悲惨な目に遭わされるのは民なのだ。

アイヌの集落(コタン)はサケの産卵場付近に設けられた。地縁集団の標識となるのが共通の首長と、産卵場の縄張り、住居新築の際の協力、サケに関わる集団儀礼だ。サケは共同体の根幹と深く結びついている。



しかし、松前藩の進出でサケ交易所が設置され、自由な交易が禁止に。その後、交易所に商人が関わると、アイヌの人たちは漁業経営に組み込まれ、強制労働や虐待など不当な扱いを受ける。ただ、この時点では、自家食分の捕食は認められた。だが、移住してきた和人に漁業権が与えられると、禁止になった。

### 奪われた伝統行事とサケ魚の権利を取り戻す

密漁監視する川筋巡回取り締まりもあって、アイヌ民族は飢餓に追いやられる。明治政府の鮭禁漁政策で鮭迎いの儀式(アシリチェップノミ)も消滅する。



アイヌ民族解放運動の結城庄司さんは1982年に「アシリチェップノミ実行委」を結成。明治政府の鮭禁漁政策で鮭迎いの儀式(アシリチェップノミ)が消滅した史実を掘り起こし、この伝統行事の復活を提案した。その後、行事は毎年、取り組まれる。奪われたサケ魚の権利を取り戻す取り組みも続く。「先住民族の権利に関する国連宣言」(2007年採択)を尊重し、アイヌの先住権・自決権の確立を目指したい、と訴えた。

### ニュースレター「人権なら」

発行:NPO法人なら人権情報センター  
〒636-0223

奈良県磯城郡田原本町鍵301-1

TEL:0744-33-8585/FAX:0744-32-8833

E-mail:info@nponara.or.jp

http://www.nponara.or.jp/